

アブラハムは大変豊かになってカナンの地へと戻ってきましたが、家畜が多くなりすぎたため、アブラハムとロトの家畜を飼う者の間に草場をめぐる争いが起きてしまいました。ロトの父は既に亡くなっていましたので、伯父のアブラハムは甥のロトを心に掛け、一緒に旅をしてきました。二人の前には、東へ行けばヨルダン川が流れる緑の豊かな土地、西へ行けば山が続く痩せた土地が広がっていました。この時、アブラハムはロトに対して、ロトに望む方を選ばせたのです。ロトは東の土地を選びました。ところで、ロトに好きな地を選ばせたアブラハムの提案について、私たちはどのように考えたらよいのでしょうか。多くの人はここにアブラハムの信仰を見えています。ロトに先に選ばせることで、神さまの導きに身を委ねようとしたのだ、と。また、アブラハムはエジプトでの体験を通して、自分の才覚で道を切り開こうとする愚かさを悟ったため、神さまが与える道を歩むべきと思い、ロトに選ぶ権利を与えたのだ、というのです。しかし、私はアブラハムは自らの決断を放棄してしまったと思うのです。自分と家族の将来がかかっている重大な場面で、アブラハムは自分で決断しなかったのです。エジプトでの出来事の影響があるかもしれませんが、彼の弱さの現れです。

創世記は、妻を売り渡してしまうような罪や弱さを持ったアブラハムが、ただ神さまの選びと恵みと導きによって、イスラエルの先祖とされていくことを語ろうとしているのではないのでしょうか。12章では、自分の才覚で身を守ろうとしたため、大きな罪に陥った姿が、13章では自分で決断することを恐れ、ロトに判断を預けて逃げてしまう弱い姿が描かれているのです。それ故に、アブラハムは、後悔し、自分のふがいなさを嘆いていたのではないのでしょうか。そのアブラハムに、神さまは「目を上げて」と言い、先の約束(12章7節)、見渡す限りの土地をアブラハムに与える約束、をもう一度言うのです。アブラハムはその語りかけによって、目を上げて、その約束を信頼し、歩んだのです。

10節には、ロトもまた「目を上げて」周囲を眺めたことが記されていました。ロトは目を上げて周囲を眺め、最もよい地を選んだのです。ロトとアブラハムの違いは、ロトが自分で目を上げたのに対して、アブラハムは神さまによって目を上げさせられた、ということです。それは、自分で目を上げてはいけない、ということではありません。ロトの目に写ったのは、どちらの方が自分にとって有利か、ということです。しかし、アブラハムの目に写ったものは、神さまの約束でした。信仰とは、神さまが語りかけて下さることに気づき、そのことに応答し、神さまと共に歩むことです。アブラハムはそのようにして、神さまの信仰の父となったのです。